

1991年10月25日 発行



寄せ蛾記

61号

◎ シバツトガがやって来た

◎ 石戸宿、千客万来!

埼玉昆虫談話会会誌



ノシメトンボ

表紙の昆虫

ノシメトンボ 秋の太陽が西の稜線を影絵のように浮かび上がらせて、空を不思議な色彩に変化させてしまうまで駆けずり回っていた子供の頃。アカトンボはそんな子供達の相手をいつまでもしてくれていました。

今も彼等は、夕焼け空の主演でしょうか。勤めを持つ身には遠い昔のことになってしまったように感じられて、少し寂しい気がします。

きり絵・・・・・・・・堤 啓輔

表紙デザイン・・・・・・・・小堀 文彦

.....

いるま蛾報 (7)

井上 寛

.....

今年は5月25日にシバツトガの初飛来があった。この小さなツトガの私宅における発見は、1977年9月11日に1♀がベランダの蛍光灯に飛来したのが端緒となった。展翅板からはずして見ると、今まで見たことのないツトガだったが、その後1頭も飛来しなかったので、本格的な調べは、雄が見付かるであろう来年に期待することにした。

1978年には、6月上～中旬、7月中旬から8月上旬、9月上旬と3回にわたって多数が飛来し、調べるのに充分すぎる位の雄雌が揃ったので、交尾器をプレパラートにして、ヨーロッパから日本まで、旧北区のツトガに関する論文、ことに Bleszynski, 1965 の旧北区全域のツトガの図説を当たったが、該当する種は見付からなかった。そこで、ひょっとすると北米あたりから新しく入って来た外来種ではないかと思い、Bleszynskiが発表したアメリカ大陸のツトガについての別刷を順に参照したが、矢張り種名を見付けることが出来なかったが、彼が中南米の9種に対して創設した *Parapediasia* BLESZYNSKI, 1963 に近い種だということだけは、交尾器の形からわかった。

矢張りアメリカの蛾らしい。そこで今度は Forbes, 1923 のニューヨーク付近の鱗翅目(1)のなかの *Crambus* 属(当時は今のように属が細分されていない)のところにある種の検索表を何回かくり返し引いた処、色彩や斑紋から *Crambus teterrellus* ZINCKEN だろうと推定するようになった。この種は、Bleszynski & Collins, 1962 の世界のツトガ亜科のカタログでは、*Pediasia* 属に入れられている。

何れにしても、日本産の蛾が1種ふえることになるので、私はひそかに喜んだものである。

同定に確信が持てなかったので、雄雌の標本をワシントンの国立自然史博物館に送った処、A. B. Klots博士から "*Crambus*" *teterrellus* に間違いのないこと、私が推定した所属 *Parapediasia* に近いが、将来は別属を設ける必要があるかも知れないという返信をもらうことができた。

ここまでたどり着いたのは、1978年9月下旬のことで、日本国内での文献を全然知らなかった。アメリカで有名な芝草の害虫なのだからシバツトガという和名が最もふさわしい

などと考えていた。

一方、国内でのこのツトガの発見と調査については、静岡大学の吉田正義博士らによる芝草を加害するガ類の研究Ⅱ (1976, 芝草研究 5(1)) で、芝草に寄生するツトガの一種として報告されたが、第Ⅳ報 (1977, 芝草研究 6(2)) で、シバツトガ *Pediasia* (*Crambus*) *teterrellus* ZINCKEN という和名と学名で報告されている。米国ジョージア州からのテイフトンシバの輸入と共に、兵庫県三田ゴルフ場に入り、コウライシバに寄生するようになったことなどが詳しく述べられ、1964年に日本に入り、土着したことが明らかになった。学名の決定には、オッタワやワシントンの専門家の忠告に従っている。シバツトガという和名は、多分1977年に吉田博士が日本芝草研究春期大会で講演したときの要旨で最初に使われ、先に引用した同年の論文で正式に命名したものであろう。

私が苦心して名前を調べていたより一年前に正体がはっきりしていたわけである。

このツトガについては、日本産蛾類大図鑑に図説したが、何分小さく、前翅の斑紋がはっきりしていないので、今でも時々同定依頼の標本の中にまざっている。私のところには、秋田、長野、三重、対馬、沖縄などの標本があって、移入後10年位のあいだに、東北から沖縄まで広く分布するようになったことがわかる。全国的にゴルフ場が造成され、芝草が移植されるといっしょに卵や幼虫が運ばれるだろうし、成虫が列車や自動車で運ばれることもあるだろう。

私宅の灯火には毎年飛来するし、大妻女子大の狭山台キャンパスの芝生でも1978年以降土着している。

本種の静岡県での生活史については、吉田ほか(1976)の論文で詳しく述べられているが、アメリカでは Ainslie, 1930: The blue webworm という論文 (U. S. Dept. Agric. Technical Bull. 173) で、生活史、分布、防除法などが記載されている。日本では、芝草を全滅させるような深刻な被害は出ていないようである。

最近の北アメリカの鱗翅目のChecklist(1983)では、Klots博士によって *Parapediasia* に入れられ、所属は蛾類大図鑑で私が示したのと同じである。

シバツトガが、兵庫県から私の住む入間市に拡がるのに12-3年かかったわけである。

埼玉県に興味ある双翅類 (2)

Parerigone macrophthalma HERTING, 1981

(ヤドリバエ科, ヒラタハナバエ亜科, Parerigonini) (本州新記録種)

玉木長寿

Parerigone 属のハエは、良く発達した剛毛、複眼の細毛密生、顔面下部の前出、などの特徴からセスジハリバエ亜科 (Tachininae) の *Linnaemya* 属に近縁とされることもあるようであるが、横線後の翅内剛毛の数が2であること、♂が特有の形態の交尾器を具えることなどから、現在はヒラタハナバエ亜科内で、Parerigonini を構成するという取扱いが広く行なわれている。

この属には、ソ連から *P. aurea* BRAUER et BERGENSTAMM の1種、旧ビルマからは *P. elistaloides* MESNIL と *P. malaisei* MESNIL の2種、日本から *P. takanoi* MESNIL, の計4種が知られていたが、その後、さらに、日本 (福岡市, 油山) からの1♀, 1♂をもとに、1981年に HERTING によって、新種として標記の種が記載 (文献⁽²⁾) された。

この種はこれまで日本 (九州) からのみ知られ、九州以外の地域からは未記録であったが、筆者は埼玉県の毛呂山町から下記の通り、2♂を採集しているので、ここに記録 (九州に次ぐ第2の記録で、本州新記録。) し、あわせて、手許の標本をもとに、文献⁽²⁾ を参考にしつつ、その主な特徴について触れてみよう。

この種の1♂標本について同定頂いた畠洪先生に厚く御礼を申し上げる。

〔採集記録〕

Parerigone macrophthalma HERTING, 1981

採集地：埼玉県入間郡毛呂山町大字箕和田字 (北山), [比企丘陵]

採集日, 性別：1♂, 20. IV. 1980 (写真1, 2). 1♂, 19. IV. 1987 (図3, 4, 5, 6).

採集, 標本保管者：筆者

〔形態的特徴〕

♂：体長9~9.5 mm (文献⁽²⁾ では8~9 mm)

色 彩：体の地色はおおむね黒色で、黄灰色粉で被われ、頭部の亜額帯と亜側顔は白灰色粉で被われる。囲口部の地色は赤褐色で黄灰色に粉飾される。小顎肢は褐色、額帯は黒褐色。触角はおおむね黒褐色、第2節と第3節基部は黄灰色に粉飾。中胸背板の1対の黒色中条は互に融合して、幅広い1暗色斑となる。黒色側条は横線で前後に分かれ、横線前のは前方に向って幅狭く、後方に向って幅広くなり、横線直前で切断状。横線後のものは、前後に幅狭くなる。腹部は剛毛基部の暗色斑と不規則に変化する暗色斑を除き、黄灰色粉で被われる。体の被毛は胸側板や腹部下面を含めて黒色。翅膜は弱く黄褐色を帯びる灰色、基半ではより橙黄色。翅脈は翅の中央部から基部にかけては黄褐色、周縁では

やや暗色。肩板と前縁脈基部片は黒褐色。胸弁は黄褐色を帯びる灰色、淡黄色の縁毛をそなえる。

頭部：額の幅は上部からみて、1複眼の約1/4倍幅、額帯は前方に向かって幅広くなる。

複眼はやや長い淡黄色毛を密生し、後頭にはやや褐色を帯びる、白黄色の長軟毛で被われ、囲口部の後方に顕著な剛毛をそなえる。

単眼剛毛は中央単眼と後単眼との間に位置する、弱く、不明瞭な1対。内頭頂剛毛は強く、外頭頂剛毛は欠く。額剛毛の数は18~20、その最下方の剛毛は、ほぼ第2触角節の顕著な剛毛の高さで、亜側顔に位置する。更に額剛毛列には細い毛も散生し、亜額帯の外半は無毛か又は殆ど無毛。

顔は額のほぼ0.9倍長、触角は顔高のほぼ0.8倍長、第3節は第2節のほぼ1.6倍長。触角刺毛はその基部の太さよりも短い微毛をそなえるのみで、殆ど裸体に近く、その長さの基部1/4程は太くなり、末端約3/5で細くなる。髭剛毛は強く、側面からみて、前口縁よりも僅かに高い位置に生じ、顔隆起縁の下部約1/5~1/4 (文献⁽¹⁾では1/6~1/5) に若干の小剛毛がある。前口縁は僅かに前方に伸び、囲口部の高さは複眼大径の約1/5倍高。小顎肢は細長く、ほぼ頭高の2/5倍長。

胸部：中剛毛2+3；背中剛毛3+3；翅内剛毛0+2（前方の剛毛は後方の剛毛までよりも、横線により近づいて位置する。翅前剛毛は1；翅背剛毛は強い2；肩剛毛は4で、その内、より強い3剛毛は鈍角三角形に並び、第4の剛毛は内側の2剛毛の前方に位置する。肩後剛毛は2；横線前剛毛は強い1（文献⁽²⁾には肩後剛毛と横線前剛毛についての記述はない）；強い背側剛毛と翅後剛毛各2（文献⁽²⁾には記述はない）；小楯板は4対の縁剛毛をそなえ、その内、側剛毛と亜端剛毛は同様に強大で、基剛毛はそれらよりも僅かに弱く、端剛毛は交叉して、斜上方に向うが、明らかに弱い。小楯板の被毛はかなり長く、上方に向い、局部的に剛毛状の毛を生じる。胸側板は黒色毛で被われ、前胸側板と前胸腹板は裸体。腹側剛毛はかなり強い2+1；翅側剛毛は欠き；下側剛毛は4~5（文献⁽²⁾では記述はない）；後胸気門は橙黄色、その直径は腹側板の上後角からの距離よりも小。後胸気門後部の楕円形状の蓋はその気門面の大部分を占める。胸弁外縁の縁毛の長さは外縁肥厚部の幅よりも長い。

翅：不明瞭ではあるが、小型の1前縁棘をそなえ（文献⁽²⁾では、「明瞭な前縁棘を欠く」と表現されている）、前縁脈下面は第1径脈（r1）の末端まで有毛。第4+5合径脈（r4+5）基部背面に1~2（文献⁽²⁾では1）、その下面にも1~2の小剛毛をそなえる。第5径室（R5）は翅端近くで開口する。中脈（m）の屈曲部は円味を帯び、中-肘横脈（m-cu）からの距離は最も近い翅縁からの距離の約3倍長。中-肘横脈は傾斜、湾曲し、中脈上で径中横脈（r-m）からは中脈屈曲部からの距離の約1.8倍長（文献⁽²⁾では1.6倍長）。

脚：剛毛については省略。♂の爪は長く、例えば前脚の爪は末端跗節の長さの約1.3倍長（文献⁽²⁾では1.4倍長）。

腹部：第I+II合背板背中部の窪みは背板の後縁に達しない（文献⁽²⁾では「背板の長さの約1/2から3/5倍長までに達する」）。第III背板の長さは最も短く、第IV背板の約4/5倍長、第V背板は第IV背板の約1.1から1.2倍長。腹部の剛毛は強大で、第II背板は4~6、背縁剛毛と側縁剛毛2、他の背板は12~14の縁剛毛環をそなえる。第III背板に2~4背中剛毛、第IV背板に8~10背中剛毛、第V背板に多数の背中剛毛をそなえる（第III、IV背板の背中剛毛についての記述は文献⁽²⁾とは若干異なる）。腹部の被毛は長く、上向する。

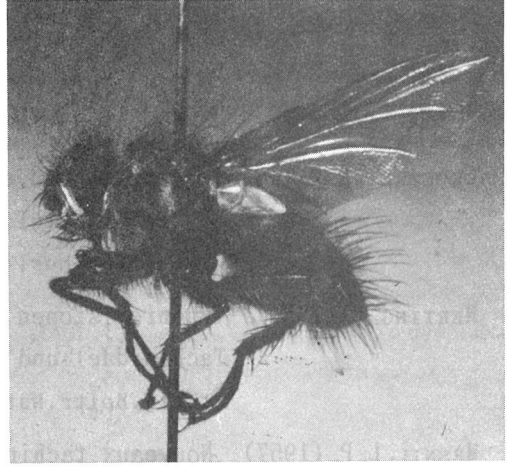
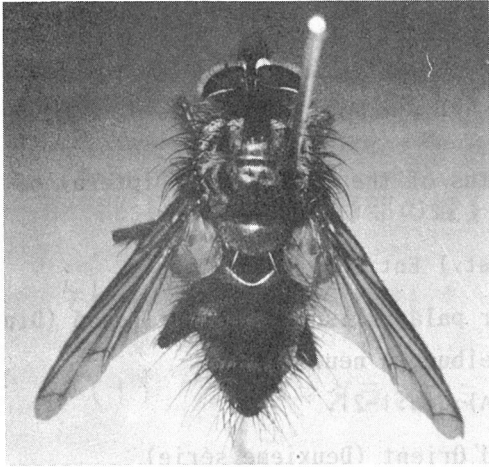
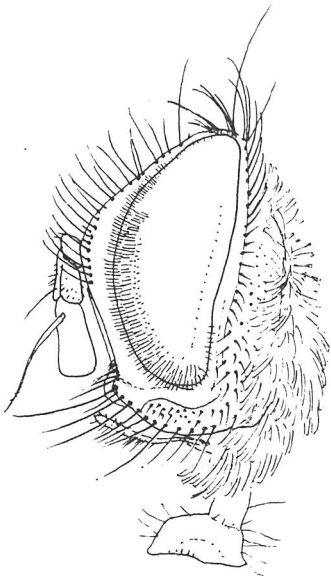


写真1

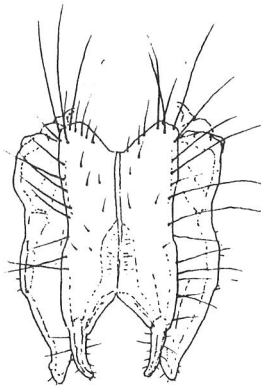
写真2

Parerigone macrophthalmalms HERTING, 1981 ♂ 体長約9.5mm 毛呂山町産. 1. 背面 2. 左側面



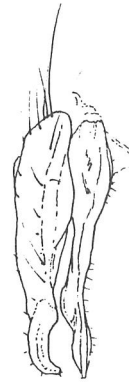
3

3. ♂ 頭部(左側面)

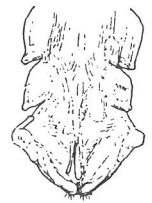


4

4,5 ♂ cerci と surstyli
(4. 背面 5. 右側面)



5



6

6. ♂ distiphallus
先端部 背面

0.5 mm.

0.5 mm.

♀の主な特徴については、手許に♀の標本はないが、参考までに、文献⁽²⁾より、簡単に抜粋引用(一部加筆)して、次に附記して置く。

頭部：額の幅は、上部からみて1複眼の約2/3倍幅(0.63倍幅)；額剛毛の数は10~12；2~3対の眼縁剛毛をそなえる。

[参考・引用文献]

1. CROSSKEY, R. W. (1976) A taxonomic conspectus of the Tachinidae (Diptera) of the Oriental Region.
Bull.Br.Mus.(Nat.Hist.) Ent.Suppl.,26:357pp.
2. HERTING, B. (1981) Typenrevisionen einiger paläarktischer Raupenfliegen (Dipt. Tachinidae) und Beschreibungen neuer Arten.
Stuttg.Beitr.Naturk., (A), 346:1-21.
3. MESNIL, L. P. (1957) Nouveaux tachinaires d'Orient (Deuxieme série).
Mem.Soc.Roy.Ent.Belg.,28:1-80.
4. ——— (1975a) Larvaevorinae (Tachinidae).
Die Fliegen der Paläarktischen Region (ed. E. LINDNER) ,
64g. 1305-1384, 1385-1435.
5. 嶋 洪 (1985) 日本から最近記載・記録されたヤドリバエ科数種について.
まくなぎ, 13:13-19.

(たまき ながひさ ㊟350-04 入間郡毛呂山町前久保 332-122)

—— 前回 [埼玉県に興味ある双翅類 (1) 寄せ蛾記60号] の訂正箇所。 ——

- p. 1137 下から9行目；基剛毛1対は・・・ほぼ平行する。 ⇒ 基剛毛1対；・・・ほぼ平行する。
- p. 1139 下から3行目；♂腹端 (図20) , Cerci (図21) と ⇒ ♂cerci (図20) , 腹端 (図21)
- 同 下から2行目；図20, ♂腹端側面；図21, Cerci 前面； ⇒
図20, ♂cerci前面, 図21, 腹端側面(ポーランド)
- p. 1140 上から6行目；♂の腹端, cerci (尾角) ⇒ ♂のcerci (尾角) , 腹端
- 同 上から11行目；その腹方 ⇒ その下方
- 同 下から2行目； Pemtatoma ⇒ Pentatoma
- 同 最下段 ； Pemtatoma metalifera ⇒ Pentatoma metalifera
- p. 1141 最下段 ； 図35, 35, ⇒ 図35, 36,
- p. 1142 上から2及び5行目； ADRABER-MONKO ⇒ A. DRABER-MONKO
- 同 上から7行目； vittat ⇒ vittata
- (数多くのミスがあり、玉木氏には大変ご迷惑をおかけしました。お詫びして訂正します。編集子)

.....

武蔵野の雑木林の衰退と蝶の変遷 (2)

石塚 祺法

.....

第一部『失われた平野部の蝶』

その3 『ゼフィルス類』

(1) ウラゴマダラシジミ

この蝶は少年時代の私は採集の経験がない。浦和市にウラゴマダラシジミが生息していたのは事実であったが、1950年当時でも生息場所のごく限られた稀な蝶であった。当時の私の行動範囲では、この蝶に出会う機会はなかった。1970年代前半で、浦和、大宮台地から姿を消したようである。この蝶の消息は残念ながら定かではない。

私とウラゴマダラシジミとの出会いは、多分、1958年の東京都府中市の東京農工大学の構内であったと思う。その後、長野県でたまに採集する程度で、この蝶は比較的縁遠いものであった。1974年冬、神奈川県大磯にこの蝶の卵を求めて何回か訪れたことがあり、多数の卵を採集し、翌年羽化させて、美しい標本を得たことがあった。しかし、成虫を多数採集したという記憶は今まで一度も経験していない。

ウラゴマダラシジミが最近、急激に姿を消したという情報はかなりあり、特に東京都下の生息地ではそれが著しい。1970年代までは、東京都世田谷には確実に生息していたが、1980年代になって絶滅したと福田晴男氏は述べている。ウラゴマダラシジミが武蔵野の雑木林から姿を消したのは本当だろうか。残念ながら、平野部での経験が府中市の大学構内での一回だけの私では、それを語る資格はないかもしれない。

私が『失われた平野部の蝶』というテーマを考えた時、この蝶はその範囲に入らなかった。私の住む大宮周辺では完全に絶滅して、この蝶の探索は絶望的であった。すでに、私の心の中からは完全に消滅してしまった蝶であった。1988年6月4日、私は体を持て余していた。あいにく雨で、どこにも行けずうんざりしていた。10時過ぎに雨があがった。もう時間が遅いので、遠くには行けない。車で20分の市野川にでも出掛けてみようかと家を離れた。そんな状態であったので、蝶の期待はなかった。ただ、この時期の市野川は私にとって初めてであったのである。

市野川—この河川敷は私にとって非常に魅力ある場所であった。標高15米の低地であったが、面白い蝶が生息している。基本的には荒川の河川敷と同じであるが、荒らされていないためか蝶の種類も多い。テングチョウやコムラサキも確実に生息しているし、荒川では姿を消したアカシジミも生息している可

能性があった。この時期では、アカシジミに期待ができたのである。

市野川の河川敷に降りた私は無意識に周囲の木を叩きまわっていた。雨あがりであったので、蝶はまだ行動していなかったからである。そんな時、白い蝶が飛び出した。私はその蝶が何だかわからなかったのである。40年もネットを振っていて、飛び出した蝶がわからない。こんな経験は初めてのことだ。一瞬の戸惑いが致命傷であった。この蝶がウラゴマダラシジミであると確認したときは、すでに蝶は林の中に消えていた。

ここにウラゴマダラシジミが飛んでいた。信じられなかった。この蝶がここで生きているなんて。背筋が寒くなったのを今でも忘れはしない。それほど衝撃を受けたのである。白い蝶影が幻でない事を願いながら、必死で木を叩きまわった。幸運なことに白い蝶影は幻ではなかった。次つぎとその姿を現したのである。約一時間、私は夢の中にいた。少年時代に戻って夢中でネットを振っていたのであった。

白い蝶影を確認したのは、30頭以上になろうか。ネットインしたのも10頭を越えた。ウラゴマダラシジミをこんなにも多数見たのは初めての経験である。しかも、標高15米の低地でのことだ。これが興奮せずにはいられようか。

同じ環境の荒川ではずっと昔に絶滅した蝶が、ここでは多数生活していた。多産地といって良いほどの個体数である。市野川にはこんな秘密が隠されていたのである。翌年、再び市野川に行ってみた。ウラゴマダラシジミが毎年、確実に発生しているか気になっていたからである。この時も白日夢を実現させてくれたのであった。そして、1990年も同じ光景を見せてくれたのである。市野川のウラゴマダラシジミは平地の宝である。この宝をいつまでも大切にしたいと思うのは私だけではないだろう。

ウラゴマダラシジミは吉見丘陵に広く棲息していて、現在は安泰であるが、個体数は断然に市野川が多い。東京周辺では次つぎに姿が消えてしまったが、武蔵野にはまだウラゴマダラシジミの豊産する場所が存在するのだ。武蔵野は奥奥深い事を実感させられたのである。

(2) オオミドリシジミ

この蝶はかつて武蔵野を代表するゼフィルスであった。過去形で表現しなければならないのもこの蝶がすでに『失われた平野部の蝶』であるからである。オオミドリシジミも過去には浦和周辺に生息していた。しかし、少年時代の私はこの蝶との出会いを経験していない。当時から稀な存在であった。

浦和、大宮台地から姿を消したのは、やはり1960年代の後半のようだ。武蔵野の雑木林の伐採と運命を共にしたのであった。

1950年代、東京都の高尾山には多産するといわれていたが、私はそこでの経験もない。私とオオミドリシジミとの出会いは、1958年、多摩丘陵の百草園で新鮮な1♂を採集したのが最初である。この時も掛け値なしに嬉しかったので、30年以上も歳月が経過しているにもかかわらず、その時の光景を鮮やかに記憶している。

その後、オオミドリシジミは長野県や山梨県で何回か採集したが、そう数多い蝶ではない。この蝶を大量に採集したのは、ウラゴマダラシジミと同様、神奈川県の大磯や中町での冬の採卵であった。標高

100米内外の低山地や丘陵地になぜかこの蝶は多産していた。

1980年代になって、武蔵野にまだオオミドリシジミが生息しているのではないかと気になって同僚に聞いてみたが、はっきりしない。やはり、自分の足で確認する他はなかった。

武蔵野でのオオミドリシジミとの出会いはまったくの偶然のことであった。1988年7月2日、ヒョウモンの調査のため、例の高根カントリーの雑木林に行ったときである。クロヒカゲのときもそうだったが、この年はヒョウモン類の調査に集中していたのであった。なぜ、高根カントリーかといえば、1985年7月にここで多数のミドリヒョウモンを目撃していたからで、ミドリヒョウモンとウラギンヒョウモンの探索に当地に来ていたのである。

いつもの習慣で木を叩いていたら、シジミチョウが飛び出した。ゼフィルスだとは解ったが、ネットに入れてみたらオオミドリシジミのメスだったのである。これが、武蔵野でのオオミドリシジミとの出会いであった。この蝶の発生時期は6月上旬である。1ヶ月遅れでは偶然に期待するほかはなく、この蝶に期待して訪れたのではなかったが、貴重な贈り物になったのであった。一週間後にも再びオオミドリシジミを採集することができた。そして、一年後、同じ場所でオオミドリシジミと再会できたのである。

調査していくうちに、オオミドリシジミは吉見丘陵にも生息していることがわかり、意外に広く生息していることがわかってきた。とくに絶滅したと思っていたが、じつはしぶとく武蔵野の雑木林に生き残っていることがわかってきた。この事実は私にとって意外であった。オオミドリシジミはすでに平野部では絶滅してしまったというのが、定説であったし、私自身もそう考えていたのである。しかも、私自身は平野部での採集経験がない。だから、この蝶については、他の蝶よりも関心が薄かった。だから頭から絶滅した蝶と思い込んでいたのである。

吉見丘陵では確実に生息していることが小野寺さんによって確認されており、さらに、驚くべきことは大宮台地の一角である上尾市の雑木林で竹内さんが1♂を確認したのである。これは、1990年の記録であり、大宮台地からは20年ぶりの記録であった。

純粋な平野部である大宮台地で、オオミドリシジミとの再会の朗報は私を勇気づけてくれた。

オオミドリシジミが平野部で今日でも生活している—この事実は武蔵野の雑木林が破壊されてしまった現在でも蝶はしぶとく生存している証であった。

1970年代、オオミドリシジミを求めて大宮の自宅から、100キロも離れた神奈川県大磯や中町にせせと通った私はいったい何だったのであろう。確かに、私はそれまでこの蝶をたくさん採集した経験がなかった。美しい蝶を欲しいという気持はあった。それは別としても、自宅の近くにこの蝶が生息しているのも知らないで、遠い場所に一生懸命通った自分が情けないやらおかしいやら複雑な気持ちに浸っている。

オオミドリシジミの採集記録

埼玉県滑川町 高根カントリー

1988-7-2 1♀採集 1988-7-9 1♀採集 1989-7-1 2♀採集

参考記録

埼玉県上尾市沼南高校付近

1990-6-10 1♂採集 竹内崇夫 (寄せ蛾記56号)

オオミドリシジミ その2

オオミドリシジミが現在も武蔵野の平地林に生活していることは、すでに述べた通りである。しかし、私自身は滑川町の高根カントリーの雑木林で採集したに過ぎない。これが、オオミドリシジミの項を書き上げてからの不満の一つであった。少なくとも、標高50米以下の平地林でオオミドリシジミを私自身が確認しないと納得できなかつたのである。特に、竹内さんの上尾市でのオオミドリシジミの採集記録は私にとって、ショックであった。わが家から僅か10キロ程度の近い場所に生息しているなんて、考えもつかなかった。このあたりの雑木林では、すでにオオミドリシジミは絶滅していると考えていたのである。幻の蝶が突然に姿を現したので、滑川町のオオミドリシジミで満足していた私は頭から冷水をあびせられた思いであった。

私が15年ぶりにオオミドリシジミの採卵調査を再開したのは、採卵によって生息地を確認しようと考えたからであるが、実際は老眼鏡のお世話になっている状態で、オオミドリシジミの採卵調査をすることは、私自身にとってかなり勇気のいることであった。第一に、オオミドリシジミの卵を発見できるかまったく自信がなかったのである。通常でも発見しにくい卵である。その上、目が悪くなっている。採卵のコツもすでに忘れていくらい、歳月が経過していた。

しかし、悪条件でもそれは私にとっては挑戦しなければならないものであった。平地林のオオミドリシジミに『こだわっている』私にとっては。

1990年12月24日、蝶友のT君から電話があった。『ウラゴマダラの採卵にいかないか』とのことであった。ふたつ返事でOKした私のターゲットはウラゴマダラシジミではなく、オオミドリシジミであった。目的地は双方が生息している可能性のある平地林を選択して、彼を案内したのが、吉見の和名沼の雑木林であった。ここにウラゴマダラシジミが生息しているのは確認していた。ウラゴマダラはT君に任せて、私はオオミドリシジミの採卵に専念した。

オオミドリシジミはコナラの大木のひこばえに産卵することが多いという昔の経験をここで適用してみるつもりであった。これなら私にも出来る。別にオオミドリシジミを大量に採卵する必要はない。生息地の確認が目的であるのだから5~10卵も得られれば上出来の成果である。

雑木林で彼と別れて、コナラのひこばえを一生懸命に調査したが、目が悪いというのは予想以上に神経が疲れる。それでも数個のオオミドリシジミの卵を採集したときは嬉しかった。オオミドリシジミの生息地の確認ということ以上に『まだ私は使いものになる』という自信の回復であった。

和名沼の雑木林では、今まで、オオミドリシジミを私自身確認していなかった。この標高20米の雑木林にオオミドリシジミが生活していたのである。

1991年1月5日、吉見の寺前池の雑木林に妻と探索に出かけた。勿論、オオミドリシジミの採卵が目的である。最初からこの林を選択したわけではなく、車を走らせている時、ひらめいたものがあった。虫屋の勘である。

果たせるかな、この名もない雑木林にもオオミドリシジミは生息していたのである。ここでも剪定鋏だけ持った行動であった。

1991年1月15日、いよいよ幻のオオミドリシジミに挑戦する日がやって来た。竹内さんの発見した上尾市原市の雑木林である。前回、桶川市の大宮ゴルフ場付近の雑木林で第一回の挑戦を試みたが、あえなく敗退の憂き目を味わった。

幻のオオミドリシジミはそんな甘いものではなかった。もっともこの場所は過去に記録のないところであったので、敗退も致しかたないのであるが、私自身は以前から秘かに狙っていた場所だったので、残念であった。もっともまだ完全にはあきらめてはいないが。

上尾市原市の雑木林は竹内さんの場所と同一かどうか知らないが、虫屋の目にはそれほど違いがないので多分同一場所であろう。ここは、比較的、大きな面積の雑木林である。コナラが主体で期待はもてそうであるが、林縁部には住宅が迫っていて、この林もあと数年で住宅地に変貌してしまう可能性のある雑木林である。

妻と二人での調査なのでまだ救われたが、変な恰好で一人で林の中をうろついていたら、付近の住民に怪しまれることは請け合いである。住宅地の周りに雑木林が辛うじて存在する。こんな雑木林でも武蔵野の平野部では上等な林であった。

約2時間の探索の結果、オオミドリシジミを5卵採集に成功した。この雑木林にオオミドリシジミは間違いなく生活していたのである。竹内さんの記録は偶産ではなく、この林で生活していた個体であったのだ。しかし、10年後、この雑木林はおそらく消滅して、住宅が建ち並んでいるだろう。そして、ここに生活しているオオミドリシジミは間違いなく絶滅するだろう。現在まで残されているのが、不思議な位、平坦な雑木林であった。

オオミドリシジミの採卵記録

1990-12-24	吉見町和名沼	10卵	1991-1-5	吉見町寺前池	12卵
1991-1-15	上尾市原市	5卵			

.....

群馬県榛名山で確認した直翅類

— 昆虫談話会合宿での記録 —

内田 正吉

.....

1990年8月4～5日に群馬県榛名山にて行われた談話会合宿の際に、採集又は目撃した直翅類を報告する。採集・観察の主な場所は、沼ノ原・榛名山荘付近などの榛名湖周辺（標高1100m）である。なお、カマドウマ類を採集して下さった小田博氏・玉木長寿氏・矢野高広氏に心よりお礼申し上げる。

キリギリス科

1. エゾツユムシ

3♂ いずれも沼ノ原の草原にて得られた。

2. ホソクビツユムシ

「ジジジジジジ・・・ブチチ ブチチ」という鳴き声をあちこちの林で聞いた。5日には樹上3mほどの高さの梢にいる発音中の1♂を目撃したが、採集することはできなかった。

3. ヤブキリ

榛名吾妻荘付近の林などの樹上で鳴いているのを聞いた。鳴き方は埼玉の丘陵地にいるのと同様の「シリシリシリ・・・」と長く鳴き続けるタイプである。

発音中の個体を目撃・採集することはできなかったが、5日の朝9時頃（晴れ）、峠付近の道路端の日のあたる林縁の草むらで♀♂ともに数個体が見られた。あるいは、日光浴をしていたのかもしれない（ここで1♂採集）。

なお、「ジジー・ジジー・・・」というヤブキリ短鳴き型のものと思われる鳴き声を沼ノ原の草原などで聞いている。

4. イブキヒメギス

榛名湖岸のちょっとした草むらで2♂採集。個体数少なくない。

5. キタハダカササキリモドキ

榛名吾妻荘付近の森林内のササ群落で得られた。4♂2♀採集。なお♂は既に成虫であったが、♀はまだ幼虫であった。

カマドウマ科

6. マダラカマドウマ

榛名吾妻荘付近の森林内の立ち枯れた針葉樹の樹皮下にひそんでいた1♂を採集。また、1♂を矢野氏採集。

7. コノシタウマ

前種同様榛名吾妻荘付近の森林内の林床にいた2♀を小田氏採集。

※ このほか、種不明の1♀（幼虫と思われる）を玉木氏採集。

コオロギ科

8. エゾスズ

沼ノ原の草原で1個体発見採集したのみ。

ヒシバツタ科

9. コバネヒシバツタ

榛名湖岸の大木の下の地表に見られた。1♂1♀採集。本種は地理変異のあることが知られているが、ここで得られた個体の外部形態は埼玉の低山地のものにきわめてよく似ている。また市川(1987)に図示されている東京高尾山産のものにも似ている。

10. ヒシバツタ

市川(1988)のハラヒシバツタに相当する。沼ノ原付近の日当たりのよい浅い草むらにみられた。個体数は少なくない。

※ 他のヒシバツタ類(ハネナガヒシバツタなど)がいないかどうか湖岸付近を探してみたが、発見できなかった。

イナゴ科

11. アオフキバツタ

沼ノ原付近の草原に見られたが、個体数はそれほど多くなかった。

12. ミカドフキバツタ

前種同様、沼ノ原付近の草原に見られたが、個体数は前種より少なかった。1♂採集したのみ。

バツタ科

13. イナゴモドキ

沼ノ原にて1♂を発見採集したのみ。

14. ナキイナゴ

沼ノ原にて♂♀数個体ずつ採集。個体数は少なくないが、そのわりには鳴き声はあまり聞かれなかった。なお、5日には交尾個体を1例観察した(午前9時30分;晴れ~曇り)。

15. ヒロバネヒナバツタ

榛名湖付近の草原に多数見られた。本種は通常翅端が腹端を越えるが、ここで得た1♀は翅の短い個体であった。

なお、寄生菌に侵されイネ科植物の葉にしがみついて死んでいるヒナバツタの一種(本種と思われる)を2例目撃した。いずれの個体も地上から数10センチメートルの高さのところではがみついていた。

16. ヒナバツタの一種

タカネヒナバツタと思われる。前種同様、沼ノ原付近の草原に比較的多く見られた。両種は混棲していたが、前種は比較的浅い草むらに多く見られ、本種はササなどが生えているやや深い草むらに多く見られる傾向があった。また、前種は飛翔するが本種はただ跳躍するのみで飛翔はしない。

参 考 文 献

- 市川 顕彦(1987) ヒシバツタノート(その6):バツタリギス, 74.
(1988) ヒシバツタノート(その8):バツタリギス, 78.

.....

左右で色違いの蛹

小堀 文彦

.....

左右でオス・メスに分かれている雌雄型がまれに得られるが、その蛹の形態がどのようなになっているのかということは、よく知られていないようである。

1989年の夏に会員の加藤靖治氏が広島県の因島に出張に行かれた。お土産に当地産のナミアゲハ *Papilio xuthus* の雌をいただいた。ナミアゲハといっても、広島産はこっちのとは違うかも知れないと思って、強制採卵することにした。

飼育して、69個の越冬蛹ができた。蛹の色は、大きく3種類に分かれ、緑色蛹21、褐色蛹45、黒褐色蛹3であった。褐色のうちの1個体は、蛹化直後のまだ緑色の時点でも明らかに左右で色彩が違っていた。

以下に図示すると共に、簡略に記載する。

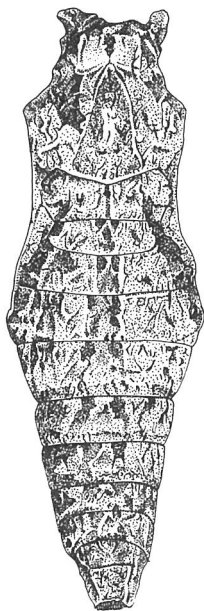


図1

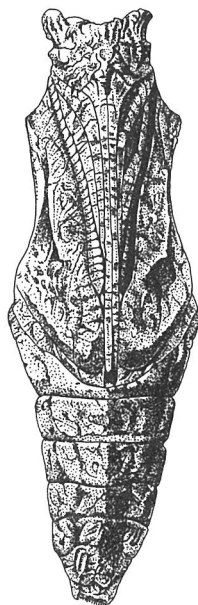


図2

○ 背面 (図1)

- ・全体として左側が暗化。
- ・頭部 左の頭頂の突起と触角基部が暗化。
- ・前胸 一对の隆起と触角に挟まれた部分が暗化。
- ・中胸 前胸左の隆起の延長部より外側が暗化。
- ・後胸 左の前翅と後翅に挟まれた部分が暗化。
- ・腹部 不規則な暗色斑が現われて全体として暗い。

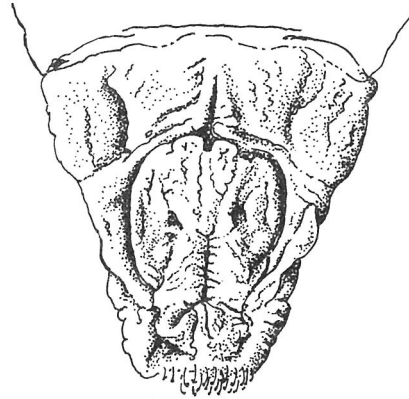


図3

○ 腹面 (図2)

- ・頭部 向かって右側が全体的に暗化していて、特に口唇の基部および触角が黒化。
- ・あし 前脚・中脚ともに一部が暗化。
- ・腹部 正中線に添って見事に色彩が違ふ。向かって左側は典型的な褐色型だが、右側は褐色型と黒褐色型との中間的な色である。

○ 腹端 (図3)

第8節には♀特有の切れ込みがあるが、続く9・10節は歪んでおり、左右で様相を異にしている。尾端のカギは向かって右側で密、左側で疎らとなっている。全体の形が歪んでいるのは、蛹化の際にプラスチックの容器と干渉したためである。

と、以上、書いてきたわけだが、この蛹からは1990年の春に正常な♀が羽化した。

キベリマメゲンゴロウ斑紋の個体変異

小堀 文彦

.....

「寄せ蛾記 58」に雛倉正人氏が、比企郡嵐山町でキベリマメゲンゴロウを採集されたことを報告している。それを読んだ私は、「えっ！埼玉初記録だったのか。そういえば俺も採ってたなア～」と思いつ出した。採集場所も全く同じらしい。金曜セミナーの時に雛倉氏にお会いできたのでその事を告げた。

採ったきりそのまま冷蔵庫にほっぽりっぱなしで、フリーザーがそのまま標本箱と化している私はとても反省した。「ちゃんとマウントしてやらねば、ゲンゴロウも成仏できまい。」と標本にする事にした。

8頭マウントしたが、みんなそれぞれに斑紋が違っている。とくに1頭は黄色斑が拡大して、まるで別種のようなのだ。ムシ達に対して、放っておいたお詫びの意味も込めて、全員の斑紋を記録しておこうと思う。

○ キベリマメゲンゴロウ *Platambus fimbriatus*

採集場所：埼玉県比企郡嵐山町都幾川河原 採集日：12. Nov. 1990

採集者：小堀文彦・小堀貴文

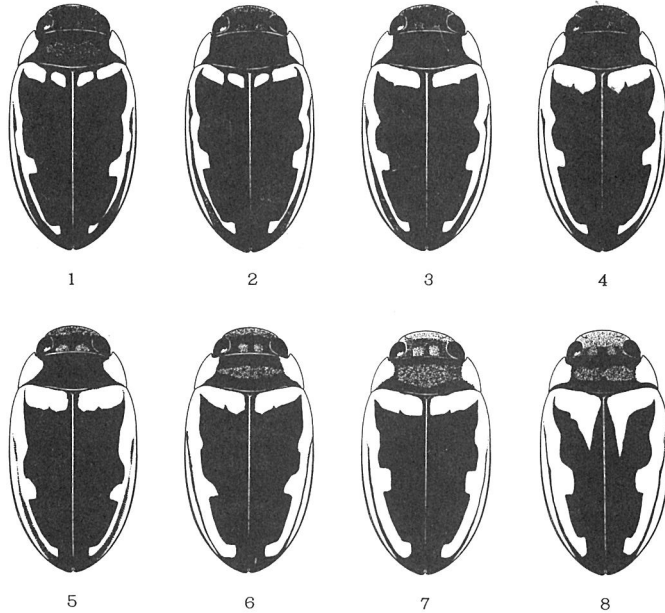


図1～8は、黄色紋の小さいものから順に並べてみたものである。図1から図7までは個体変異といってもそれほど顕著な違いはないが、図8の個体は、ほかと比べるとまるで別種のようなのである。斑紋異常の範疇にはいるかもしれない。なお、斑紋の性差については一切検討していない。

アオマツムシは忍者修行中

萩原 昇

近年、急激に分布を拡大しているアオマツムシ。筆者の住んでる春日部市でも10年ほど前から、その鳴き声を聞くようになり、現在ではアオマツムシの大きな声で、他のコオロギなどの声が掻消されそうである。しかし、たくさんの鳴き声を聞くわりにその姿を見る機会が少ない。筆者は、その姿を撮影すべく9月28日午後8時、懐中電灯を持ちカメラを肩に近くの公園に出かけた。

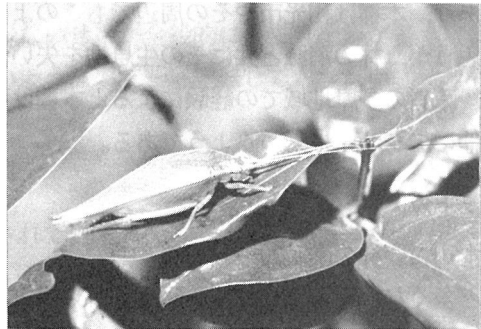
背の低い木を見つけ、息を殺して近づく。声はすれど姿は見えぬ。大きな声のわりに臆病な虫である。人の気配がすると直ぐに鳴き止んでしまう。懐中電灯の光はことさらである。何度か近づいては離れ、近づいては離れを繰り返したが、無駄な努力だった。そこで、鳴き声を目当てに姿を捜すのではなく、一枝一枝を虱つぶしに捜すことにした。するとわりと簡単にアオマツムシを発見できた。2♀を発見したが♂は発見できなかった。

発見したものの、カメラに収めるのはそう簡単ではなかった。アオマツムシは忍者のように葉の影、枝の影と姿を隠すのである。しかも、体を枝や葉に密着させ、周囲の緑に溶け込んでしまう。仕方無く、アオマツムシを採集して家に持ち帰り撮影した。その際、次のような行動を観察したの報告する。

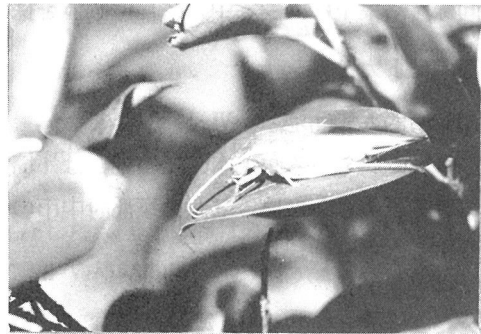
多くの場合、アオマツムシは自分姿を隠すために、枝や葉と体を平行に置き、触角を真っ直ぐに伸ばす(写真A)。アオマツムシをしばらく追い続けるうち、葉から触角が大きくはみ出す場所に静止した途端、触角を折り曲げ体の下にしまい込んだ(写真B)。この行動は、その後場所を変えて、何度も観察された。

人間の目から見ると、何とも不自然で目立つ行動である。

アオマツムシ君、もっと修行したまえ。



(写真A)



(写真B)

.....

埼玉県で採集したカメムシ・若干の記録

柳田 恒一郎

.....

筆者が1981~1986年に埼玉県内で採集したカメムシのうち、記録に残しておきたいものを報告する。

1) ブチヒゲカメムシ

1♂, 和光市西大和団地, 22-III-1981

西大和団地東側の家庭菜園にて採集したものだが、現在当地は既に外郭環状道路建設工事のために失われている。本種は平地では少ないものと思われる。

2) アカスジキンカメムシ

1 幼虫, 和光市西大和団地, 29-XII-1982

雑木林の落葉下にて越冬中の幼虫を採集した。前種のところで述べたように当地は既に失われた生息地であり、本種は和光市やその周辺でもこのような分断された雑木林において細々と生息しているものと思うが、林の消滅と共にその生息地を失いつつあるものと思われる。

なお、筆者の多摩地域での経験によると本種はキブシやハンノキ、カツラ、ニシキウツギといった樹木の他にアジサイにもつくようである。

3) スコットカメムシ

1 ♀, 滑川村森林公園, 20-XI-1983

さほど多くない種と思われる。落葉下から採集した。

4) イチモンジカメムシ

1♂, 滑川村森林公園, 20-XI-1983

前種同様、落葉下にて越冬中(?)の個体を採集した。県内での記録は少ないようである。

5) ルリクチブトカメムシ

1♂, 和光市西大和団地, 8-VI-1983

美しいカメムシであるが、本県での記録は「埼玉県動物誌」を見るかぎり東松山、正丸峠、皆野町三沢における三例しかない。なお東京都府中市の多摩川の河原では、アレチマツヨイグサ上でかなり普通に産する本種を確認している。

6) エビイロカメムシ

1 幼虫, 和光市西大和団地, 24-VII-1984. 1♂, 和光市西大和団地, 23-VIII-1984

ススキのシーピングで得られた。県南ではシーピングの草原は次々と宅地や駐車場などに変わっていくので本種の生息地は減る一方であろう。

7) ノコギリヒラタカメムシ

1 ex., 和光市西大和団地, 5-V-1982

本種は低山地から山地では普通に見られるが、本県での平地における記録はないようなので記録しておく。

8) イトカメムシ

1 ex., 和光市西大和団地, 4-I-1986

エノキ落葉下で越冬中の個体を採集した。本県における記録は少ないようであるが、カメムシ屋でもないかぎりネットインしても捨ててしまうのだろう。

9) ヤニサシガメ

1 幼虫, 和光市西大和団地, 30-I-1983

スギ皮下から得られた。本種はスギやアカマツに生息する普通種であるが、こうした樹木を失いつつある市街地では神社や学校、公園などで細々と生息しているのみであろう。

10) ヒョウタンメクラガメ

1 ex., 浦和市秋ヶ瀬公園, 30-X-1982 (他に数頭目撃)

メクラカメムシ科の種は愛好者(採集者)が少ないせいか全般的にあまり記録が多くないようである。「埼玉県動物誌」でも川本での記録しかないようなので一応記録しておきたい。

11) ナカグロメクラガメ

1 ex., 和光市西大和団地, 24-X-1982

「埼玉県動物誌」では北本、武甲山から記録されている。

12) ヒメセダカメクラガメ

1 ex., 和光市西大和団地, 1-X-1982

「埼玉県動物誌」では児玉、上吉田、皆野から記録されており、また北本市石戸宿での昆虫調査報告にも記録されている。

13) シロテンツヤメクラガメ

1 ex., 和光市西大和団地, 1-X-1982

「埼玉県動物誌」では入川谷、川又、雁坂峠、東松山から記録されている。

最後に、先に述べたように和光市西大和団地に存在した菜園・草原は外郭環状道路工事のため既に消失しているが、当地では他にウズラカメムシ(1♂ 26-VII-1984 他)やホオズキカメムシ(1 ex. 13-X-1984)などを採集していることを加えておく。

.....

音楽の中の虫たち (3)

碓井 徹

.....

前回予告をしたトンボに関する2曲の楽譜が入手できたので紹介する。

◆ **Die Libelle** -Polka mazur- op. 204 (トンボ -ポルカ・マズルカ- 作品204番)

DIE LIBELLE

POLKA-MAZUR

von

JOSEF STRAUSS.

Op. 204

Eingang. Polka - Mazur.

Piano.

- ◇ 作曲 : JOSEF STRAUSS, Jr. (1827-1870)
- ◇ 楽譜 : Die Libelle (Polka-mazur), EDWIN F. KALMUS, New York
- ◇ 録音 : CD: [ニューイヤール・コンサート 1989 (決定盤) カルロス・クライバー, CSC8355] など

☆【作品について】ヨハン・シュトラウス二世の弟、ヨーゼフ・シュトラウスによる軽快なポルカ・マズルカ。上掲のCDの保柳健氏による解説によれば、初演は1866年10月21日、フォルクスガルテンの野外音楽堂にて。楽譜は、銀座ヤマハを通じて出版譜を調べてもらったが、ミニチュアスコアは出版されていないようで、このようなピアノ・コンダクター譜が送られてきた。出版年は不明。

◆ **En slända** op. 17 no. 5 (トンボ 7つの歌 作品17 第5曲)**En slända.**

(Oscar Levertin.)

Die Libelle.

(Deutsche Umdichtung von Alfr. Jul. Boruttau.)

Jean Sibelius, Op. 17 N^o 5.

Tempo rubato. *commodo* *mp* *Una corda.*

Du vack.ra slän - da, som till mig flög
Schö.ne Li - bel - le, schwirrtest mir her.

◇ 作曲 : JOHAN JULIUS CHRISTIAN SIBELIUS (1865-1957)

◇ 楽譜 : En slända, D. L. -V. 5195. BREITKOPF & HÄRTEL, Wiesbaden

◇ 録音 : CD; [Sibelius: Songs, Vol. 1 A. S. von Otter(ms) / B. Forsberg(pf). BIS-CD-457] など

☆【作品について】フィンランドの国民主義作曲家シベリウスによるピアノ伴奏歌曲『7つの歌 作品17』の第5曲は、Oscar Levertinの詩による『トンボ』。上掲のCD (BIS-CD-457, スウェーデン輸入盤) のAndrew Barnettによる解説によれば、歌の中で《Slända - トンボ-》という歌詞がトリルをかけて歌われているのは、トンボのはばたく翅を表現しているとのこと (楽譜では短2度でトリルを指示している)。楽譜は、作品17を1曲ずつのピースで出版しているようだ。上掲の楽譜には“Copy-right 1906, 1907”と記されている。銀座ヤマハから入手。

上掲のCDに紹介されていた歌詞の英訳を下に掲げる。

You, beautiful dragonfly that flew in to me / When my longing was deepest,
reading my book, / You came to my soul with all of summer. / You came and
I forgot all my old sorrow. // I only saw you, I judged my day as happy,
/ O beautiful dragonfly. // But when I was most jubilant that you were
mine / And praised life's gift on my knees, // You flew out the same way
you had come in, // O bewitching dragonfly. // Tears of parting ran into
words of farewell, / No bitterness was in the cup we drank clean. // We
forgot you were sun and I was only shadow. // Fly light, fly blue, summer
joy, / Blessed, which was once mine, / My beautiful dragonfly.

深谷市でオオキトンボを採集

田中 剛

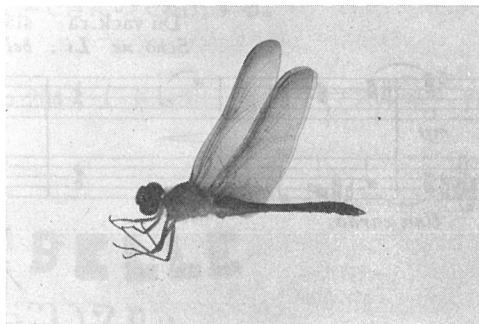
1989年9月、深谷市利根川河川敷でオオキトンボ *Sympetrum uniforme* (SELYS)を採集しているので報告する。採集地は上武大橋 下流側の河川敷の突端部で、川岸にはアシが繁茂しているような場所であった。オオキトンボは、こちらが近付くと非常に速く飛んでは戻ってくるといふ動作を繰り返した。複数の個体が見られたので、単なる偶産ではなく、当地で発生した可能性もある。

採集個体：オオキトンボ 2♂

採集場所：埼玉県深谷市上武大橋付近

採集日：1989年9月16日

採集者：田中 剛



(たなか つよし 〒114 北区 王子 6-2-2-201)

埼玉県におけるムスジイトトンボの初記録

新井 裕

だいぶ古い記録であるが、手元の標本を整理したところ、埼玉県産のムスジイトトンボが発見できたので報告する。

本種は、関東地方では稀なイトトンボで、埼玉県からは未記録であったと思う。採集記録は以下のとおりである。

採集地 埼玉県春日部市牛島 (東武野田線『藤の牛島』駅近くの古利根川河畔)

採集日 1981年8月17日

採集個体 1♂

採集者 新井裕

本標本の存在を知るきっかけとなったのは碓井徹氏のご教示によるもので、同氏に対し厚くお礼申し上げます。

(あらい ゆたか ☎369-12 大里郡寄居町末野 1233-2)

浦和市内のクワガタ採集

星野 正博・山本 彰人

筆者；星野の同僚の息子さんの山本彰人君がクワガタを採りたいというので浦和市南部領辻へ出掛けて、以下のような結果を得たので記録しておきたい。

当地は以前よりフィールドとしてよくでかける場所でおよその見当は付けてあった。「採れますよ」と案内して虫がいなくて困ることになると思っていたが、かなりの数のクワガタが棲息していることがわかった。日中に周辺の森を見た様子では、かなりの場所で子供達が歩き回っている様子が感じられた。

以下2日間の記録は、山本彰人君からの報告である。

1991年7月26日 19:30~20:30 埼玉県 浦和市 南部領辻

探索したクヌギ、コナラは10本程度で、そのうちの4本から採集された。

ノコギリクワガタ 2♂3♀.

コクワガタ 5♂1♀.

カブトムシ 3♂3♀.

この他、地面に落下して不明になった個体もあり、かなりの数があることがわかった。

1991年8月25日 場所時間は上記と同じ

コクワガタ 4♂1♀.

カブトムシ 2♀ (目撃).

(ほしの まさひろ ☎338 与野市下落合 5-14-31)

(やまもと あきひと ☎336 浦和市北浦和 5-3-3)

小鹿野町でモンキアゲハを目撃

星野 正博

この10数年、埼玉県秩父郡内でのモンキアゲハの記録はかなり増えつつあると理解しているが、個体数はそれほど多くない。

1991年8月22日から24日まで小鹿野町合角地区、釜の沢・伊豆沢林道(文珠堂~文珠峠~般若)を地質調査実習で廻った。ネットを持たないので採集はしてないが、オナガアゲハ、(ミヤマ?)カラスアゲハは結構の個体数を目撃したが、全般的に昆虫類は非常に少ない感じを受けた。この中で、合角ダムの水没予定地斜面のクサギを訪花しているモンキアゲハとカラスアゲハ類が混飛するのを目撃した。

目撃個体 : モンキアゲハ 1ex.

目撃場所 : 埼玉県秩父郡小鹿野町合角

目撃日 : 1991年8月22日

目撃者 : 星野 正博

(ほしの まさひろ ☎338 埼玉県与野市下落合 5-14-31)

埼玉県では記録の少ないイトトンボ科5種の記録

碓井 徹

筆者は、埼玉県内ではこれまであまり記録の多くないイトトンボ科5種について、以下のとおり採集しているので報告する。記録は、採集場所：採集個体、採集日、の順で並んでおり、採集はすべて筆者による。また、同一地での採集記録には地名を省略し、[;]で続けてある。なお、採集個体に () がついているものは、確実な目撃記録である。すなわち、1♂2♀(1♀)とあれば、雄を1頭、雌を2頭採集したほかに雌を1頭目撃していることを示している。

- 1) ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei*
八潮市南川崎：2♂2♀, 19. VI. 1991.
- 2) ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum*
北本市蓮沼：1♀(1♂), 26. VI. 1991 ; 1♂, 7. VII. 1991.
- 3) アオモンイトトンボ *Ischnura senegalensis*
岩槻市黒谷：1♂(1♀), 28. VIII. 1991. 越谷市西新井：1♂1♀, 13. VIII. 1991 ; (1♂), 15. VIII. 1991. 越谷市増林：1♀, 28. VIII. 1991. 草加市柿木町：1♂, 15. VIII. 1991. 蓮田市貝塚(山ノ神沼) : 1♂2♀, 17. VIII. 1991.
- 4) ムスジイトトンボ *Cercion sexlineatum*
岩槻市黒谷：1♂, 16. VIII. 1991.
- 5) セスジイトトンボ *Cercion hieroglyphicum*
岩槻市黒谷：2♂, 16. VIII. 1991 ; 2♂, 28. VIII. 1991. 北本市古市場：1♂(1♂), 3. IX. 1991 ; (1♂), 4. IX. 1991. 越谷市増林：2♂1♀, 28. VIII. 1991. 南埼玉郡白岡町荒井新田(柴山沼北側の休耕田) : 1♂, 17. VIII. 1991.

これらの採集地の一部は、行政が作った公園内の人工池である。それらの環境について以下に述べる。
〔岩槻市黒谷〕黒谷団地のはずれにある『水上公園』の人工池。元荒川から数100m離れており、この公園の東側には水田が広がっている。*Cercion*属は上記2種のほかにもオオイトトンボも産するが(写真参照)、どれも個体数は少ない。水生植物はほとんど生育しておらず、これらのイトトンボ類は、落枝や落葉、護岸用のコンクリートパネルの隙間から伸びた雑草の葉などに静止しているのが観察された。同地ではこれらのイトトンボ類のほかに、ウチワヤンマやコシアキトンボなどが見られ

る。いずれにしても、池が造成されたあとに、近隣の生息地から入り込んできたと考えられる。

[北本市古市場] 現在も造成中の『北本総合公園』の池。同地は、公園をつくる前は水田と湿地だったそうで、この池は、もともと沼地状になっていたところに手を加え、3年程前に現在のような状態にしたらしい。イトトンボ類では、上記のセスジイトトンボのほかに、クロイトトンボ・アジアイトトンボなどが見られた。

[越谷市西新井] 『県民健康福祉村』の沼。ここは以前から広い沼地が広がっていたところだそうで、周辺を整備して公園化したのが、水辺は良好な自然状態がわずかながら保たれている。イトトンボ科では、アオモンイトトンボの他に、アジアイトトンボとオオイトトンボを採集している。

[越谷市増林] 越谷総合公園の人工池。野球場や大きな体育館などが集まった総合公園の中に作られた人工的な池であるが、周囲をすべてコンクリートで護岸せず、一部分に水生植物を植栽した岸辺を作っており、この草地でアオモンイトトンボやセスジイトトンボが見られる。

[草加市柿木町] 現在も造成中の『そうか公園』内の人工池。池には水生植物はまったくないが、ごく一部分に小規模な『菖蒲田』が作られており、アジアイトトンボも見られた。

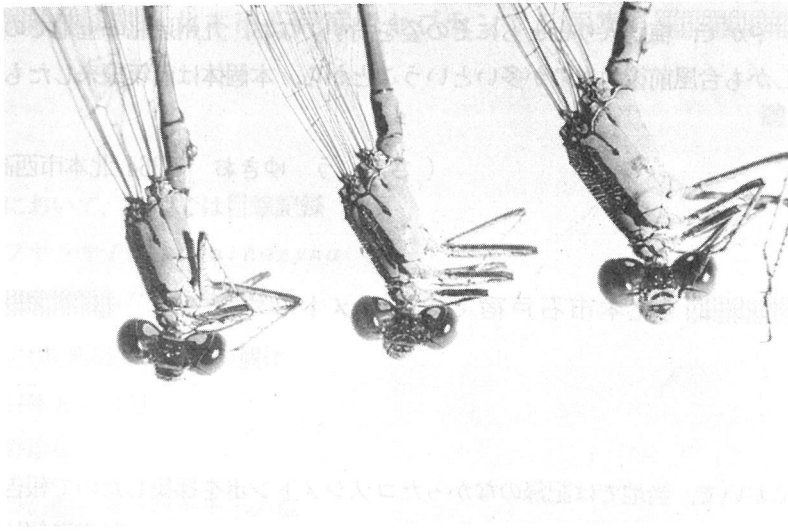


写真 左:オオイトトンボ♂ 中:セスジイトトンボ♂ 右:ムスジイトトンボ♂
3個体とも採集データは次のとおり。岩槻市黒谷:16.VIII.1991, 碓井徹。

未筆ながら、これら採集地に関していろいろと情報をお寄せくださった当会会員の鈴木幸・磯野治司両氏に感謝申し上げます。

(うすい とおる ☎362 上尾市壺丁目454-3)

北本市石戸宿でオオギンヤンマを採集

三宮 幸雄

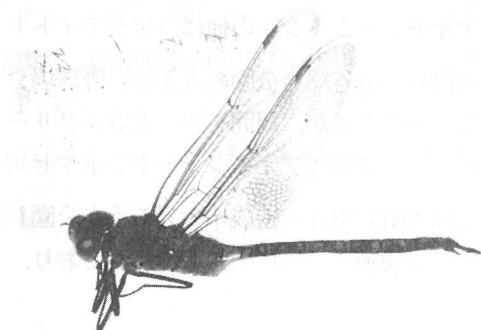
北本市石戸宿において、県内初記録と思われるオオギンヤンマ *Anax guttatus* 1♂(成熟個体)を以下の通り採集したので報告する。なお、磯野治司氏(当会会員)に指摘されるまでこの採集個体(写真の個体)がオオギンヤンマであることには気付かずにいた。磯野氏には、日頃よりご教示御協力をいただいていることを記しお礼申し上げます。また、未筆ながら報告をすすめてくださった碓井徹氏に、この場をお借りし、厚く感謝申し上げます。

採集日 1991年5月21日(火) 午後2:00

採集地 北本市石戸宿

採集者 三宮幸雄

同地でこの時期に比較的多く見られるクロスジギンヤンマの調査をしていたところ、桜堤下の沼の水面をパトロールしている本個体を発見、ネットインしたものである。その後もオオギンヤンマと思われる数個体を目撃(筆者以外の目撃例有)したが、採集には失敗した。やがて、梅雨入りとともにその姿を消す。なお、九州以北の土地での採集記録の多くが8~9月で、しかも台風前後のものが多いということから、本個体は前年飛来したものの次世代とも考えられる。



(さんぐう ゆきお ☎364 北本市西高尾 1-259)

北本市石戸宿でコノシメトンボを採集

三宮 幸雄

北本市石戸宿において、当地では記録のなかったコノシメトンボを採集したので報告する。

採集個体 コノシメトンボ *Sympetrum baccha matutinum* 1♂(成熟個体)

採集日 1991年9月3日(火) 午後3:00

採集地 北本市石戸宿

採集者 三宮幸雄

本個体は、北里病院調整池付近の斜面林の枝先に静止していたものである。

(さんぐう ゆきお ☎364 北本市西高尾 1-259)

北本市石戸宿でマイコアカネを採集

磯野 治 司

北本市石戸宿において、当地では記録のなかったマイコアカネ *Sympetrum kunckeli* を採集したので報告する。

採集個体 1♂ (成熟個体)

採集日 1991年9月5日

採集者 磯野治司

本個体は、谷戸に面した斜面林の枝先において、他のアカネ類とともに静止していたものである。採集時間は午後4時30分頃である。未筆ながら、本記録の発表をすすめてくださった碓井徹氏に謝意を表します。

(いその はるじ ☎363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A202)

北本市石戸宿でヤブヤンマを採集

磯野 治 司

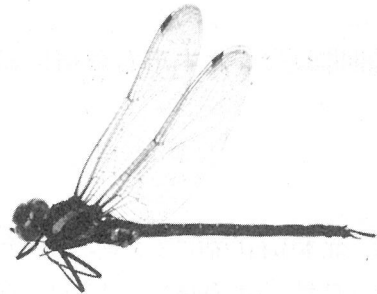
北本市石戸宿において、当地では目撃記録のみであったヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* を採集したので報告する。

採集個体 1♂ (成熟個体) 写真の個体

採集日 1991年8月4日

採集者 磯野治司

本個体は、谷戸の間に築かれた土手の草地斜面を、約15m×20mの範囲で旋回飛翔していたもの。採集時刻は午後6時20分頃である。



(いその はるじ ☎363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A202)

北本市石戸宿における蝶2種の記録

磯野 治司

筆者は、当地でこれまで記録のなかった下記の蝶2種を目撃しているので報告する。

1) アオバセセリ 1991年8月18日 午後4時頃

谷戸に面した雑木林の林縁を、小刻みに訪花しつつ敏速に飛翔していた。

2) モンキアゲハ (汚損個体) 1991年9月3日 午前11時頃

北里メディカルセンター付近の道路上を、ゆっくりと飛翔していた。

(いその はるじ ☎363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A202)

北本市石戸宿にてクロコノマチョウを採集

斉藤 清

筆者は、北本市石戸宿にてクロコノマチョウを採集したので報告する。

採集個体 1 ♀ (夏型 やや汚損個体) 1 ♀ (秋型 新鮮個体)

採集日 1991年8月31日 午後

採集当日は、小型台風14号が早朝通り過ぎた大変蒸し暑い日で、同一場所で2頭を採集した。

(さいとう きよし ☎362 上尾市大字向山 550-1 日建シェトワ4-202号)

北本市石戸宿におけるクロコノマチョウの採集例

碓井 徹

筆者は、北本市石戸宿にてクロコノマチョウを以下の通り採集しているので報告する。

1 ♂ (夏型, 汚損個体) 18. VII. 1991

1 ♀ (秋型, 新鮮個体) 1. IX. 1991

2頭とも、エドヒガンザクラ付近の薄暗い遊歩道沿いの林縁で採集した。

(うすい とおる ☎362 上尾市荻丁目454-3)

石戸宿, 千客万来 碓井 徹

ここまでの3ページにわたる北本市石戸宿での新記録種の短報, いかがでしたでしょうか。

会をあげておこなった同地での昆虫相の調査報告を『寄せ蛾記 48号 北本市石戸宿の昆虫類(特集号)』として発表した後も, 同地での昆虫相調査は会員有志によって引き続き行われており, これまでにもいくつかの記録が本誌に短報などの形で発表されています。

特にトンボ類に関しては, 三宮幸雄・磯野治司両会員による精力的な調査により, 1986年当時は不十分だったトンボ相の解明が急ピッチですすみ, これまでに40種ものトンボが同地から記録されるに至りました。勿論, 偶産の種も1, 2ありますが, それでもこの狭い土地の中で40種ものトンボが記録されるということは, 自然環境が急速に減少しつつある大宮台地の現状を考えてみれば, たいへん驚くべきことと言えるでしょう。また, 同地に生息することが知られるようになったナゴヤサナエなどの生態調査に, 一昨年あたりから東京方面のトンボ研究者たちが同地をボチボチと訪れているようす。

このように, ムシもヒトも賑やかな石戸宿ですが, この地に県が自然観察公園をつくることをご存知でしょうか。すでに新聞等では計画が発表され, 観察舎の建設も今夏から始まっています。この公園化計画, 開発の手を逃れて現状の自然環境を保全し, 武蔵野の原生物相を後世に伝えるのならば大変価値の高い, 大いに評価される計画なのですが, とんでもないことに, 中央部に大きな池を掘る計画が具体化しているのです。石戸宿の中央部に広がる湿地が育てている豊富な植物群集と豊富な昆虫相を水の下に沈めてしまおうとしているのです。本県平野部に僅かに残された極めて貴重な湿地環境を破壊するようなこの計画は, なんとしても中止してほしいものだと思います。本誌次号にて, 1986年以降の同地の昆虫相に関する新知見を整理しつつ, この無謀な計画について詳細にレポートする予定です。

ここで一息, 怒りを静めるコントです。

《もし, この地にとんでもない池ができあがってしまった時の, 私とトンボ仲間の会話》

☆ 口の悪いA氏と。

A: 『碓井!! オマエ, あの石戸宿に池作ったんだってッ! ガハハハハッ…………… バカッ!!!』

私: 『……………』。

☆ いつも優しいB氏と。

B: 『よかったねエ, いつもコシアキトンボとオオヤマトンボがいっぱい飛んでて…。』

私: 『ええ, 昨日なんか, ウチワヤンマとシオカラトンボもバッチリでしたし…。』

☆ 野鳥にも詳しいC君と。

C: 『碓井さん, よかったですね, 双眼鏡で同定できる種類ばかりになって。』

私: 『甘いなァ君は。オオヤマトンボの美しい複眼の緑を楽しむには, ニコンのフィールドスコープ, それも赤リングでなきゃ, だめなのサ』

オソマツでした。

北本市蓮沼でチョウトンボを採集

三宮 幸雄

北本市蓮沼において, チョウトンボ *Rhyothemis fuliginosa selysnum* を採集したので報告する。

採集個体 1 ♀ (未熟個体)
 採集日 1991年6月16日(日) 午後12:00
 採集地 北本市蓮沼
 採集者 三宮幸雄

本個体は、沼に面した竹林の枝先に静止していたものを採集したものである。6月25日にも、同地において沼地付近から舞い上がった♂(未熟個体)を1頭採集した。その後も数個体を目撃している。

(さんぐう ゆきお ☎364 北本市西高尾 1-259)

大宮市でウスイロコノマチョウを採集

齊藤 洋一

1991年9月15日午後1時半ころ、大宮市三橋通り青葉園の霊園内にて、ウスイロコノマチョウ1♂夏型を採集したので報告する。当日は、雨模様の天気でも気温もやや低く、建造物付近の植え込みより飛び出した。前後翅共やや汚損した個体だった。

(さいとう よういち 〒132 江戸川区平井 5-26-12)

上尾市でアサギマダラを採集

齊藤 清

以下のとおり、上尾市においてアサギマダラを採集したので報告する。

採集個体 1♂ (やや汚損) やや小型ながら新鮮な個体だった
 採集場所 上尾市大字向山付近の雑木林
 採集日 1991年8月6日 午後

(さいとう きよし ☎362 上尾市大字向山 550-1 日建シェットワ4-202号)

東京・亀戸でウスイロコノマチョウを目撃

塘 久夫

東京・亀戸近くの繁華街で偶然ウスイロコノマチョウを目撃したので報告する。

目撃個体 ウスイロコノマチョウ 夏型 1個体 (雌雄不明)

(翅には汚損のない、比較的新鮮な個体)

目撃場所 東京都墨田区文花 (明治通りに面したパチンコ店の外壁)

目撃日時 1991年10月4日 10:35pm

夜10時半、仕事からの帰路、亀戸駅近くの歩道を歩いていて、何気なく道路際のパチンコ店の方に目を向けた時、まったく偶然に、バタバタと飛び回っているウスイロコノマチョウを見つけた。場所は東京の下町の繁華街で、しかも明治通りに面しているの、夜間のこの時刻とは言え、まだ交通量も多く、歩道には人通りも多いところなので少々びっくりした。ウスイロコノマチョウがいたのは、パチンコ店の出入り口ドアのすぐ上のガラスの外壁で、時々バタバタと飛び回るが、すぐに水平なサッシ上に静止する。裏翅の波模様と蛇の目紋のはっきりとした夏型で、翅には汚損のない比較的新鮮な個体だが、雌雄は判別できない。素手で採集しようと近づくと、蝶の止まっている場所がちょうど自動ドアの真上なので、近づいた途端にドアが開いてしまい、その衝撃で飛び立ってしまった。しかし、パチンコ店内部の照明が明るく、歩道上はうす暗いので、明るい方へ飛ぼうとするのか、ガラス壁をバタバタとすることで位置はほとんど変わらず、しばらくすると再び元と同じ場所に止まった。時々、パチンコ店に出入りする客があり、そのたびに自動ドアが開閉するので、ウスイロコノマチョウは止まったり飛び回ったりを繰り返している。採集するのをあきらめて10分程じっくりと観察していたが、そのうちにパチンコ店の店員が不審そうに出て来たので仕方なしにその場を立ち去った。

この蝶は迷蝶なので、台風が通過した後にしばしば採集・目撃されているが、今年台風の当たり年で、最新は9月27日夜、目撃日のちょうど1週間前に台風19号が東京を通過している。

(つつみ ひさお ☎345 南埼玉郡宮代町宮代台 1-20-15)

東京国立市でホソオチョウを発見

中村 英夫

ホソオチョウを、東京都国立市で記録したので報告する。

1991年8月15日、国立市谷保の多摩川左岸堤防で夥しい数の成虫とウマノズクサ葉上の幼虫を確認し、成虫6♂2♀を採集した。この場所は、過去に有名になった日野市百草園の記録地から直線距離で約2.4Km離れており、あいだに市街地と多摩川・浅川を挟んだ対岸の中央高速道路の橋から数十m下流地点である。

百草園のかつての生息地から自力で飛来したものか、だれかの放蝶によるものかは分からないが、百草園で記録された年からあまり間のない、10年前の1981年6月上旬に同地を歩いたときは、本種は全く見られなかった場所である。

いずれにしても、国立市においての初記録と思われ(「東京都の蝶」[西多摩昆虫同好会編1991]によれば国立市は未記録、同市に隣接する市の80年代以降の定着地として、府中・小金井の2市が記載されている)、本種の放蝶によらない分布拡大の可能性を考えると、埼玉県への侵入プロセスなどの参考になるので発表する。

(なかむら ひでお ☎607 京都市山科区竹鼻地藏寺南町16 A2-37)

伊奈町におけるクマゼミの記録

氷室 美芳

1991年7月23日の午前9時15分、伊奈町小室の県道を歩いていたところ、道路から東へ30m位入った所に数本のシラカシ（樹高25～30m位）の中の1本の高さ20m位の所で、1頭のクマゼミが盛んに鳴いていた。姿は確認できなかったが、200m位先まで行っても鳴き続けていた。尚1989年7月にも自宅からかなり離れた所で鳴き声らしいのを聴いたが、確認は出来なかった。

(ひむろ みよし ☎362 伊奈町小室 227)

静岡県田方郡函南町の昆虫数種の記録

氷室 美芳

1991年9月3～6日、同地の丹那トンネル上の山に少し入った駒の湯温泉に泊まった。ここはまだ可成り自然度が高い所で、以下の昆虫を確認した。

1. ウスイロコノマチョウ
4. IX. 1991 宿の階段踊り場で1頭採集
2. クマゼミ
3-4. IX. 1991 両日とも2, 3個体の鳴き声を宿付近の森で聴いた。この辺には定着していると思われる。
3. マツムシ
3-4. IX. 1991 両日とも宿の庭で1～2頭が鳴いていた。
4. スズムシ
3-4. IX. 1991 両日とも数頭が宿の庭で鳴いていたが、ベランダのライトに1♂が飞来、採集した。
5. アゲハモドキ
4. IX. 1991 宿の露天風呂の外灯で1 ex. 採集。
6. シズオカオサムシ
5-6. IX. 1991 2日間トラップ12本を設置したところ、3♂2♀がはいった。

(ひむろ みよし ☎362 伊奈町小室 227)

埼玉県産ハッチョウトンボの標本が里帰り

碓井 徹

埼玉県におけるハッチョウトンボの記録は、矢野・梶村 (1956a) による日高市女影 (発表当時は入間郡日高町女影, 1991年10月1日より日高市になった。以降, 本稿では当時の記録も含めて日高市と記述する) ものが最初のものであり, この1956年当時の発見の様子は矢野・梶村 (1956b) に詳しく報告されている。発見から後の数年間, 同地にはトンボ研究者が訪れて本種を採集していることは当時の現地の様子を知る人々の発言からも間違いないことなのであるが, これらの採集記録はおそらくどこにも発表されていない。その後, 長須 (1978) によって, [熊谷市神拝湖; 1♂3♀, 28. VII. 1974, 松崎雄一採集] という記録が紹介され, これによって発見から現在に至る35年ほどの間, 本県におけるハッチョウトンボの記録は, どれも前述の文献3編からに限られたものになっている。

このように, 日高市のハッチョウトンボはたった1度の採集記録が残されたままいつの間にか同地から姿を消してしまい, 誰が同地のハッチョウトンボの標本を所有しているのかも皆目見当がつかない状況になってしまっていたのであるが, この度, 縁あって, 最初の発見者のお一人で現在は岡山県在住の日高重明氏から日高市産ハッチョウトンボの貴重な標本の寄贈を受けたのでここに紹介する。

※※ 本の紹介 ※※ 『日高町史 自然史編』 埼玉県入間郡日高町 1991年3月31日発行
B5版 530pp. 全ページカラー印刷, 上製本函入り 頒布価格 6,000円。

各地で相次いで刊行されている市町村誌の自然部門の1冊であるが, 内容・造本共に第1級の出来であるので, この本に多少のかかわりを持った一人として, 少々手前味噌ながら紹介する。

本書は, 日高町 (1991年10月1日より市制施行, 本書刊行時は日高町) が1987年から4年間にわたり多くの調査員を動員して調査・研究を重ねてきた同町の自然環境調査の集大成である。内容は, 大きく『地象』『水象』『気象』『植物』『動物』の5部門にわかれ, それぞれカラー写真や図をたっぷり使って一般の人々にも理解しやすい内容となっている。当会会員では, 『動物』部門の中で, 《膜翅類》を南部敏明, 《双翅類》を原勝司, 《鞘翅類》を斎藤良夫, 《蝶類》を斎藤太郎, 《蛾類》を市川和夫の各氏, 《トンボ類》を碓井が調査・執筆を担当している。

また, 本書は他の市町村誌同様, 読者を一般町民と想定しているため, 記述内容にあまり専門的なことは含められず, いわゆる学術的な新知見や調査記録などは盛り込まれていないが, 各部門の調査データや種のリストなど (動物部門では《双翅類》《蝶類》《蛾類》《トンボ類》について) が『自然史編 調査記録集』として発行が予定されている。通常は曖昧になりがちな市町村誌の記述内容に関して, 本編刊行の際に裏付けとなる調査データ集を発表する同町の姿勢は, きわめて高く評価されるものであり, 今後各地で刊行されるであろう『自然編』についても, 行政の担当者に『元になるデータ集を公表』する姿勢を求めていくべきであろうと考える。

本書の郵便を利用した入手方法は, 以下のとおりである。

- ◇ 現金書留に6,140円 (送料込み) を入れて, ㊟350-12 日高市鹿山 318-1 日高市教育委員会 社会教育課 市史編さん室 (☎ 0429-85-0291) へ。
- ◇ 日高市鹿山 370-20 日高市生涯学習センター (☎ 0429-85-5121) を訪れても直接購入できる。

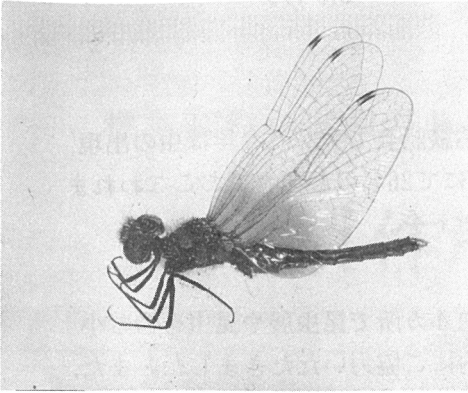


写真1

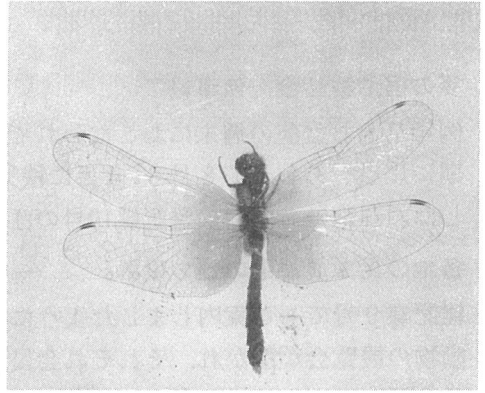


写真2

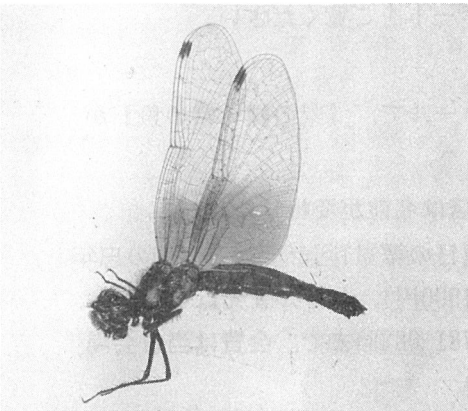


写真3

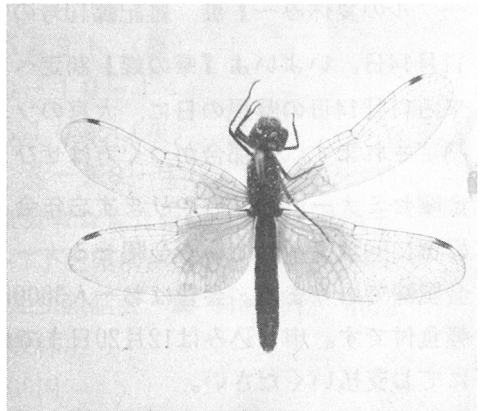


写真4

今回、寄贈を受けたのは矢野重明氏の採集による4個体で、以下のラベルがついている(写真参照)。

2♂(写真1,2) 武蔵高萩; 1956年6月10日 2♀(写真3,4) 武蔵高萩; 1958年6月16日

1958年採集の2♀は、寄贈を受けた段階では1本の針に2個体が串刺しになっていたが、慎重に針からはずして1頭ずつの標本にし、片方にはコピーしたラベルを付けた。どの標本も30年以上も前のものとは思えないほど非常に保存状態のよいものであった。

ラベルの採集地名が『武蔵高萩』となっているが、これは採集地に最も近い駅の名を便宜的に記述したもので、矢野・梶村(1956b)によれば採集地は『日高町女影』であるのは明白なので、今後もこの生息地は日高市女影という地名で統一したい。

なお、4標本のうち、展翅された♂(写真2)と横刺し標本の♀(写真3)の計2頭は、筆者の判断で長瀨にある埼玉県立自然史博物館で収蔵されることになった。残りの2頭は筆者が保管している。

未筆ながら、埼玉県産ハッチョウトンボの標本を里帰りさせるご配慮をいただいた当会会員の矢野重明氏に紙面をお借りして厚くお礼申し上げる次第である。

《参考文献》

矢野重明・梶村秀樹(1956a) : 高萩産チョウ・トンボ採集品目録. *Argynnis* 6(1) : 8-9, 青葉会

矢野重明・梶村秀樹(1956b) : ハッチョウトンボ武蔵高萩に産す. *Argynnis* 6(1) : 11-12, 青葉会

長須房次郎(1978) : 埼玉のトンボ類. 埼玉県動物誌 : 403-432, 埼玉県教育委員会.

(うすい とおる ☎362 上尾市老丁目454-3)

寄 せ 蛾 記 61号 目 次

井 上 寛	: いるま蛾報 (7)	1153
玉 木 長 寿	: 埼玉県の興味ある双翅類 (2)	1155
石 塚 祺 法	: 武蔵野の雑木林の衰退と蝶の変遷 (2)	1159
内 田 正 吉	: 群馬県榛名山で確認した直翅類	1164
小 堀 文 彦	: 左右で色違いの蛹	1166
小 堀 文 彦	: キベリマメゲンゴロウ 斑紋の個体変異	1168
萩 原 昇	: アオマツムシは忍者修行中	1169
柳田 恒一郎	: 埼玉県で採集したカメムシ・若干の記録	1170
碓 井 徹	: 音楽の中の虫たち (3)	1172
田 中 剛	: 深谷市でオオキトンボを採集	1174
新 井 裕	: 埼玉県におけるムスジイトトンボの初記録	1174
星野正博・山本彰人	: 浦和市内のクワガタ採集	1175
星 野 正 博	: 小鹿野町でモンキアゲハを目撃	1175
碓 井 徹	: 埼玉県では記録の少ないイトトンボ科5種の記録	1176
三 宮 幸 雄	: 北本市石戸宿でオオギンヤンマを採集	1178
三 宮 幸 雄	: 北本市石戸宿でコノシメトンボを採集	1178
磯 野 治 司	: 北本市石戸宿でマイコアカネを採集	1179
磯 野 治 司	: 北本市石戸宿でヤブヤンマを採集	1179
磯 野 治 司	: 北本市石戸宿における蝶2種の記録	1180
斉 藤 清	: 北本市石戸宿にてクロコノマチョウを採集	1180
碓 井 徹	: 北本市石戸宿におけるクロコノマチョウの採集例	1180
碓 井 徹	: 石戸宿, 千客万来	1181
三 宮 幸 雄	: 北本市蓮沼でチョウトンボを採集	1181
斉 藤 洋 一	: 大宮市でウスイロコノマチョウを採集	1182
斉 藤 清	: 上尾市でアサギマダラを採集	1182
塘 久 夫	: 東京・亀戸でウスイロコノマチョウを目撃	1182
中 村 英 夫	: 東京国立市でホソオチョウを発見	1183
雛 倉 正 人	: 狭山湖畔でヨコヤマトラカミキリを採集	1184
柳田 恒一郎	: 和光市でヒグラシとクマゼミの声を聞く	1184
氷 室 美 芳	: 伊奈町におけるクマゼミの記録	1185
氷 室 美 芳	: 静岡県田方郡函南町の昆虫数種の記録	1185
碓 井 徹	: 埼玉県産ハッチョウトンボの標本が里帰り	1186
	本の紹介 『日高町史 自然史編』	1186
	会 報	1188
	編集後記	1188